新潮文庫

遠野物語

柳田国男著

新潮社

遠野物語（とおのものがたり）

定価220円

新潮文庫 草47A

昭和四十八年九月三十日 発行
昭和五十五年十月十五日 十七刷

著者 柳田国男（やなぎたくにお）

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二二六六)五一一一
編集部(〇三)(二二六六)五四二一
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

㊫ 印刷・東洋印刷株式会社 製本・有限会社加藤新栄社
© Tamemasa Yanagita 1973 Printed in Japan

新潮文庫

遠野物語

柳田国男著

目次

初版序文……七
再版覚書……一一
遠野物語……一五
遠野物語拾遺……七五
後記……折口信夫……一九三
解説……山本健吉……一九八
年譜……二〇九
索引……二一五

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

遠野物語

初版序文

此話はすべて遠野の人佐々木鏡石君より聞きたり。昨明治四十二年の二月頃より始めて夜分折折訪ね来り此話をせられしを筆記せしなり。鏡石君は話上手には非ざれども誠実なる人なり。自分も亦一字一句をも加減せず感じたるまゝを書きたり。思ふに遠野郷には此類の物語猶数百件あるならん。我々はより多くを聞かんことを切望す。国内の山村にして遠野より更に物深き所には又無数の山神山人の伝説あるべし。願はくは之を語りて平地人を戦慄せしめよ。此書の如きは陳勝呉広のみ。

昨年八月の末自分は遠野郷に遊びたり。花巻より十余里の路上には町場三ヶ所あり。其他は唯青き山と原野なり。人煙の稀少なること北海道石狩の平野よりも甚だし。或は新道なるが故に民居の来り就ける者少なきか。遠野の城下は則ち煙花の街なり。馬を駅亭の主人に借りて独り郊外の村々を巡りたり。其馬は黝き海草を以て作りたる厚総を掛けたり。虻多き為なり。猿ヶ石の渓谷は土肥えてよく拓けたり。路傍に石塔の多きこと諸国其比を知らず。高処より展望すれば早稲正に熟し晩稲は花盛にて水は悉く落ちて川に在り。稲の色合は種類によりて様々なり。三つ四つ五つの田を続けて稲の色の同じきは即ち一家に属する田にして所謂名処の同じきなるべし。小字より更に小さき区域の地名は持主に非ざれば之を知らず。古き売買譲与の証文には常に見ゆる所

なり。附馬牛の谷へ越ゆれば早池峯の山は淡く霞み山の形は菅笠の如く又片仮名のへの字に似たり。此谷は稲熟すること更に遅く満目一色に青し。細き田中の道を行けば名を知らぬ鳥ありて雛を連れて横ぎりたり。雛の色は黒に白き羽まじりたり。始めは小さき雞かと思ひしが溝の草に隠れて見えざれば乃ち野鳥なることを知れり。天神の山には祭ありて獅子踊あり。茲にのみは軽く塵たち紅き物聊かひらめきて一村の緑に映じたり。獅子踊と云ふは鹿の舞なり。鹿の角を附けたる面を被り童子五六人剣を抜きて之と共に舞ふなり。笛の調子高く歌は低くして側にあれども聞き難し。日は傾きて風吹き酔ひて人呼ぶ者の声も淋しく女は笑ひ児は走れども猶旅愁を奈何ともする能はざりき。盂蘭盆に新しき仏ある家は紅白の旗を高く揚げて魂を招く風あり。峠の馬上に於て東西を指点するに此旗十数ヶ所あり。村人の永住の地を去らんとする者とかりそめに入り込みたる旅人と又かの悠々たる霊山とを黄昏は徐に来りて包容し尽したり。遠野郷には八ヶ所の観音堂あり。一木を以て作りしなり。此日報賽の徒多く岡の上に燈火見え伏鉦の音聞えたり。道ちがへの叢の中には雨風祭の藁人形あり。恰もくたびれたる人の如く仰臥してありたり。以上は自分が遠野郷にて得たる印象なり。

思ふに此類の書物は少なくも現代の流行に非ず。如何に印刷が容易なればとてこんな本を出版し自己の狭隘なる趣味を以て他人に強ひんとするは無作法の仕業なりと云ふ人あらん。されど敢て答ふ。斯る話を聞き斯る処を見て来て後之を人に語りたがらざる者果してありや。其様な沈黙にして且つ慎み深き人は少なくも自分の友人の中にはある事なし。況や我九百年前の先輩今昔物語の如きは其当時に在りて既に今は昔の話なりしに反し此は是目前の出来事なり。仮令敬虔の意

と誠実の態度とに於ては敢て彼を凌ぐことを得と言ふ能はざらんも人の耳を経ること多からず人の口と筆とを倩ひたること甚だ僅なりし点に於ては彼の淡泊無邪気なる大納言殿却つて来り聴くに値せり。近代の御伽百物語の徒に至りては其志や既に陋且つ決して其談の妄誕に非ざることを誓ひ得ず。窃に以て之と隣を比するを恥とせり。要するに此書は現在の事実なり。単に此のみを以てするも立派なる存在理由ありと信ず。唯鏡石子は年僅に二十四五自分も之に十歳長ずるのみ。今の事業多き時代に生れながら問題の大小をも弁へず、其力を用ゐる所当を失へりと言ふ人あらば如何。明神の山の木兎の如くあまりに其耳を尖らしあまりに其眼を丸くし過ぎたりと責むる人あらば如何。はて是非も無し。此責任のみは自分が負はねばならぬなり。

おきなさび飛ばず鳴かざるをちかたの森のふくろふ笑ふらんかも

柳田国男

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

再版覚書

前版の遠野物語には番号が打ってある。私は其第一号から順に何冊かを、話者の佐々木君に送った記憶がある。其頃友人の西洋に行って居る者、又是から出かけようとして居る者が妙に多かったので、其人たちに送ろうと思って、あの様な扉の文字を掲げた。石黒忠篤君が船中で此書を読んで、詳しい評をしておこされた手紙などは、たしかまだどこにか保存してある。外国人の所蔵に属したものも、少なくとも七八部はある。其他の三百ばかりも、殆ど皆親族と知音とに頒けてしまった。全くの道楽仕事で、最初から市場に御目見えをしようとはしなかったのである。

此書の真価以上に珍重せられた理由は是だと思う。今度も同じ様な動機で覆刻を急ぐことになったのだが、以前にも私は写しますなどという人が折々は有るので、多少の増訂をして二版を出そうと思い、郷土研究社には其予告をさせ、且つ古本商には警告を与え、佐々木君にはもっと材料があるなら送って来るように言って遣った。同君も大いに悦び、手帖にあるだけを全部原稿紙に清書して、或時持って来て、どさりと私の机の上に置いた。これを読んで見ると中々面白いが、何分にも数量が多く、又重複があり出したくないものがまじって居る。これを選り別けて種類を揃え、字句を正したり削ったりする為に、自分でもう一度書き改めようとした。或はきたなくとも元の文章に朱を加えた方が早かったかも知れない。自分の原稿がまだ半分ほどしか進まぬ内に、

待ち兼ねて佐々木君が聴耳草紙を出してしまった。

聴耳草紙は昔話集であるのだが、あの中には私がこちらへ載せるつもりで居た口碑類を若干は取入れてある。昔話も二つか三つ、是非とも遠野物語の拾遺として出そうと思って居たものが、聴耳の方で先に発表せられてしまった。そうで無くても後れがちであった仕事が、是で愈々拍子抜けをして、終に佐々木君の生前に、もう一度悦ばせることが出来なかったのは遺憾である。

今度は事情がちがうから、二十五年前の遠野物語を、重版するだけに止めて置こうかという意見もあったが、それでは是に追加するつもりで、折角故人の集めて置いた資料が、散逸してしまうかも知れぬ懸念があるので、やはり最初の計画の通り、重複せぬ限りは皆是を附載することにした。此中には自分が筆を執って書き改めたものが約半分、残りは鈴木君が同じ方針の下に、删定整理の労を取ってくれられた。順序体裁等はほぼ本編に準ずることにして、是亦同君に一任し、更に郷土研究其他の雑誌に散見する佐々木君の報告で、性質の類似するものだけは此中に加えて置いた。斯うして見ると初版の遠野物語ばかりが、事柄は同じであるのに文体がちがい、且つ引離されてあることが如何にも理に合わない。或は是も書き改めて、類を以て集めた方がよかったのかも知れぬが、それでは自分に取って記念の意味があまりに薄くなるのみならず、一方旧本に対する無益の珍重沙汰が、尚いつ迄も続かぬとも限らぬ。そう大したもので無かったということを、弘く告白する為にも原形を存して置いた方がよいと思うのである。

実際遠野物語の始めて出た頃には、世間は是だけの事物すらもまだ存在を知らず、又是を問題にしようとする或一人の態度を、奇異とし好事と評して居たようである。しかし今日は時勢が全

く別である。斯ういう経験はもう幾らでも繰返され、それが一派の学業の対象として、大切なものだということも亦認められて来た。僅か一世紀の四分の一の間にも、進むべきものは必然に進んだ。是に比べると我々の書斎生活が、依然として一見一聞の積み重ねに労苦して居ることは、寧ろ恥じ且つ歎かねばならぬのである。少なくとも遠野の一渓谷ぐらいは、今少しく説明しやすくなって居てもよい筈であったが、伊能翁は先ず世を謝し、佐々木君は異郷に客死し、当時の同志は四散して消息相通ぜず、自分も亦年頃企てて居た広遠野譚の完成を、断念しなければならなくなって居る。此の如きは明かに蹉跌の例であって、毫も後代に誇示すべきものではない。嗣いで起るべき少壮の学徒は、寧ろ此一書を繙くことによって、相戒めて更に切実なる進路を見出そうとするであろう。それが又我々の最も大なる期待である。

柳田国男

遠野物語

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com